

【オリジナルティーチングプラン】

～カブトムシProject～

守谷市立守谷小学校

1 はじめに

本県では、「科学技術創造立県いばらき」の将来を担う人材を育成するため、理科授業の質の向上，自然体験・科学的な体験の充実を通して，児童生徒の理科の学力向上を図ると，うたっています。

そこで，本校では，理科授業の質の向上をねらって，高学年において理科専門教諭による教科担任制（3年目）を実施しています。今後は，自然体験・科学的な体験の充実を図っていきたいと考え，このプロジェクトを立ち上げました。

2 ねらい

- ・カブトムシの飼育体験を継続して実施することにより，生命尊重の心を育てる。
- ・生き物に対する興味・関心を高め，飼育の課程で生じるさまざまな課題に創造的に取り組める資質を育てる。

3 実践

（1）堆肥ゲージの再建… 4月

- ・グラウンド整備のため撤去になった堆肥ゲージを再建。



（2）飼育マニュアルの作成… 4月

- ・幼虫～さなぎ～羽化～卵までをサイクルとした飼育方法を確立する。

【成長の様子】

カブトムシは，産卵された翌年には成虫になりますが，クワガタ虫は種類や暮らしている場所の気候，食べるエサの状態などによって成長の速さが異なります。早いもので1年，中には2年以上かけて成虫になるものもあります。幼虫ではカブトムシ，クワガタ虫とも3齢幼虫でいる期間がもっとも長くなります。

【くぬぎマット】

幼虫は，くぬぎマットや朽木を食べて育ちます。くぬぎマットと朽木は，適度な水分を含ませてから使用します。マットの水分は，軽く握って手を開いたときに形がくずれずに残っているくらいがベスト。

【サナギになったら】

成長しきった幼虫は，蛹室という部屋をつくってサナギになります。蛹室をこわしたり，サナギを傷つけたり，また外から強い衝撃を与えたりすると，うまく成虫になれないことがあります。成虫になるまでは，特に注意して扱きましょう。

【産卵のさせ方】

産卵させるには，オス1匹にメス2匹くらいで飼育するようにします。オスを2匹以上入れたら，カブトムシとクワガタ虫をいっしょのケースにすると，警戒してタマゴを産まないことがあります。また，ケースはなるべく静かなところに置きましょう。

- (3) 幼虫の購入，飼育，放虫… 5月～9月
・飼育ケースを使って，教室でも観察する。

- (4) 越冬… 10月～3月
・幼虫時代に栄養があるえさをたくさん食べさせると大きな成虫になることが分かった。



4 考察

生き物を飼い続けるということは，大変な営みであり，労力のいることである。根気や忍耐，あるいは命あるものを守るといった強い使命感が必要である。そして，それらのことを支えるものは，飼い続けることで次第にわかってくる生き物たちのさまざまなしぐさ，動きをとおして感じる愛らしさや親しみなどの愛情であろう。

生き物たちのもつ親子の愛情の深さに触れたり，しぐさの愛らしさに触れたりすること。あるいは，ぐんぐん育っていく成長の様子から感じられる生命力の素晴らしさ。これらは，飼い続けることによって得られる学びの内容である。それは，間接体験では得ることがむずかしいものである。感受性の豊かな児童期に，命あるものと直接触れ合うという体験を行うことによって，命の大切さ，愛おしさといった生命尊重の気持ちを育てることができた。

さらに，世話をするという行為からは，強い責任感が芽生えるとともに，自己有用感を意識し，ひいては自尊心が育つようになってくることも見逃せない。このことが，自分もカブトムシも共に命あるものとして，大切にしようとする気持ちを育てていくことにつながっていく。

5 課題

学校における望ましい生き物の飼育を行うにあたっては，必要かつ十分な条件を整えることが大切である。また，条件整備を行うこと自体も飼育の大切な内容でもある。

生き物の飼育のねらいの実現には，まず学校で飼育する意義や目的について，教科や特別活動等における位置づけや指導の基本との間で明確にし，飼育に対する考え方をしっかりもたなければならない。

次に，それを保護者や学校の近隣及び地域の人々に説明し，理解や支援を得るようにする。飼育活動にこれらの人々の意見を反映させることも考えられる。

生き物の飼育にあたっては，何よりもこうした取り組みが必要になってくる。そして，これを毎年確認し合い，常に新たな気持ちで飼育を続けることが大切である。

